



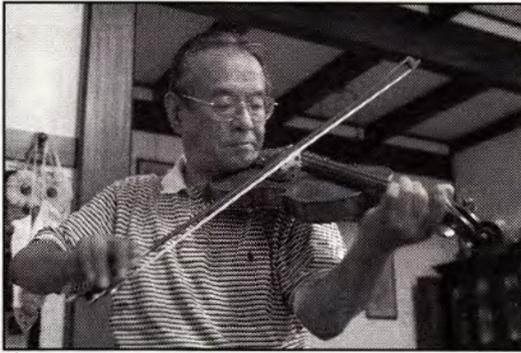
ヴァイオリン

中嶋嶺雄(70)

国際教養大学学長



私とヴァイオリンの出会い
は終戦直後の1947年。
ヴァイオリンを使つて幼児
期から才能教育を行う「ス
ズキ・メソード」で世界に
知られた鈴木鎮一先生が、
私の故郷に松本音楽院を開
校したのです。従兄が趣味
でヴァイオリンを弾いてい
たのを羨ましく思い、私は
両親にせがんで同校の一期
生になりました。



愛器とともに

鈴木先生のお弟子の中か
らは江藤俊哉氏や豊田耕児
氏など著名なヴァイオリニ
ストが輩出しました。私の
同期の鈴木門下生も、私以
外は全員プロになつていま
す。私の場合は、始めたの
が10歳で、一期生の中では
一番の年嵩。始めるのがち
よつと遅すぎたんですね。
ただ、それ以来、ずっと続
けていますから、ヴァイオ
リン歴は60年になる。あく
までも趣味でやっているの
ですが、サントリイホール
や日本武道館などで演奏し
たこともあります。

そういう機会が多くなる
と、自分の腕前は棚に上げ
て、もつと良い楽器があれ
ばもつとよく弾けるか
も、と思つてしまふ。いろ
いろと探した結果、91年に
手に入れたのが、フランス
随一のヴァイオリン製作者
として知られるJ・B・ウ
イヨームの1869年物で
した。
ヴィヨームはストラディ
ヴァリウスなどイタリアの
名器のイミテーション作家
としても知られ、バガニー
ニが修理を頼んだところ、
さつそくその模造品を作つ
てきて、バガニーニにも全
く区別がつかなかったとい
う逸話の持ち主。
しかも、私が入れた
ヴィヨームは、39年11月27
日の日付の鑑定書によれば
"I. a. S t e r n" が持
ち主となつている。私も愛
好した世紀のヴァイオリニ
スト、アイザック・スター
ンのミドル・ネームがaだ
つたのか、そして所有者が
本当に彼だったのか、あえ
て確認してはいませんが、
彼の活動歴に照らして、そ
んなロマンを感じさせる楽
器でもあるのです。

我が愛器は私には少し大
きいがよく響き、ニスの仕
上げがすばらしく、品があ
ります。ある種の偶然によ
つて出会つたヴィヨームを、
一生大事に弾いていこうと
思っています。

内職から

生まれた

躑躅名所

躑躅。難しい字だが、もとも
は「行きつ戻りつ」の意味で、
山躑躅の枝葉を食べた羊が歩
行困難になつたことから出て
いるという。どれほど根拠が
あるか明らかではないが、漢
字の好きな日本でも愛用され
ている。
太平の文化が爛熟した江戸
時代には、珍種の植木や花を
争う園芸ブームが発生したら
しい。あいついで出版された
園芸書は学術的にも一流とい
われるが、有名な『花壇地錦
抄』などを著した染井(東京・
豊島区)の庭師・伊藤伊兵衛
は伊賀藤堂藩の御庭番の出身
だった。園芸の世界でも、教
養と時間の余裕のある武士の
活躍が目立っている。
学識のある武士が新種の開
発に熱中していたから花の命
名にも漢語が多くなつた。躑
躅で有名だったのは大久保
(新宿区百人町付近)で、『江
戸名所図会』には「大久保の
映山紅」とあり、
(満庭紅を灌ぐが如く夕陽



(PR)